



遠くまで



fujikichihaya

別離

さっきまでいた 明るい窓際に もう誰も座らない

同じ旋律をなぞっていた 優しい口笛は 二度と響かない

背の高い影を 見かけるたびに あの人を思うでしょう

私がいなくても ストライプのシャツは 綺麗なまま

この部屋に 立ち竦んでいた香りは もう別の場所に流れ込んでいった

さよなら どうか その人と お幸せにね

飲みかけのコーヒー 一人分を そっと闇に放した

片思い

夕立に叩かれた靴とバッグを気にしながら

彼女と あの人は 思いっきりドアを開けた

くるりと翻った空気の 無愛想な背中が出ていく

高い声と 低い声が 交互に重なるたびに

手元の紅茶は酸味を帯びて 苦くなる

もう メニュー表にはない さよならを注文しよう

あまりにも 長く 強く 好きでいすぎた

痛々しい打撲の青さを かばうように

ここから どこかへ向かう 道を探した方がいい

楽しそうな座席の反対側を サンダルで蹴っていく

決意に満ちた腕は 今 一人でドアを開け放った

あの人と 彼女は多分 いつもと同じ飲み物を 頼むだろう

醜く歪んだ景色には もう おぼろげな虹がかかっていた

視線

あなたの 肩先に 花の雫がこぼれおちていく

そこで 時間が止まってしまうような気がした

読み込むことのできないページを 不意に開いてしまったかのよう

どんな感覚で ありふれたフレーズを口にしようかと躊躇う

どんな空気を載せて あなたを呼び止めようかと考える

繰り返すうちに 馴染んだ鞆が 重すぎることに気づく

好きとか 嫌いとか そんな単純な問題ではない

ただ 凜として あなたの目を見据えたいと思うけれど

できない いつになったら あなたは色褪せてくれるのだろう

地面には 水たまりが ひしめき合っている

あなたを彩る 全てのものを 歪ませようとして

結局 いつも 強く思っている方が 屈折していくしかない

冷え始めた夕暮れの窓辺で 小さくなる影だけを 探している

忘れる

紅葉が空に映える頃

私はあなたを 忘れるでしょう

あなたが かつて そうしたように

都合の良い羽根だけを 追いかけるでしょう

無言の響きばかり 抱きしめていたから

もう 拡散する言葉さえ ありません

怒りも 悲しみも ありふれた痛みも

全て あなたとは別の 小さな灰に変わっていきます

静けさと喧騒の狭間に立って

私はあなたを 忘れるでしょう

あなたが 私を 忘れたように

何の濁りもない川を 通り過ぎるでしょう

そのために 何千 何万もの砂は 流れます

泣くことも ためらうことも 惜しむこともなく

あなたとは違う場所を 選んで 消えます

ありがとう もう二度と 出会うことは ない

忘却の果てを 探し出すように

汽船は わざと澄まして 波の上を滑り出します

遠くまで

洗いざらい 想起してきた人たちを 追い払うまで
こんなにも 踵はすり減ってしまった と ふと思う
夏はいつも呑気に 視界の先を 揺らめかせている
照りつけた高層ビルの下で たくさんの影が 短く切られている

差し出した右手を思い出す
途中で それは 氷の渦に巻き込まれてしまった
交わっていたメッセージを読み返す
一番 聞きたかった言葉は 今も未読のままだけど

待っていてと 言っても 言わなくても
あの人たちは 強制されるでもなく そこに砂埃を立てていった
一步の距離が 一世紀に値するように
あの賑わいは全部 永遠の沈黙の中に溶けてしまった

戻らないことで 守れることもあると 頑なに信じて
真っ青なネクタイは 潔すぎる冷気を装っている
もっと 遠くまで行こう 誰もが忘れてしまえるほど 遠くまで

馴染みだった 面影に 屈しないように 今 重いステップに力を込める